

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 加藤 久美子

聖書の知恵文学の代表である箴言は、表題の存在などを手がかりとして、伝統的に全体を7部に分けて理解され、そのうちの箴言第II部(「10章1節～22章16節」)は、簡潔な2つの句から構成される、文法的に完結した375行の詩文が並び、義人と邪悪な者を対置して教訓を語ることで内容的に顕著な特徴を有している。著者は先行研究の歴史を踏まえて、箴言第II部の解釈に関する自分の立場、箴言の詩文全体がある意図のもとに編纂されたという構成体説の立場に立って、現段階において著者の考えるもっとも妥当な読みの方法を提示することを課題とした。

本書は、全8章構成で末尾に補論を置く。第1章では、箴言全体を構成する7つの部分を概説し、第II部を取り出して分析を加える根拠を示す。続く第2、3章において、従来の研究者による箴言の伝統的解釈を示す。通説によれば、箴言第II部のテキストは、最終編者が格言を無作為に寄せ集めて作ったもので配列に特別の意味はないとされて、これを収集体説と呼ぶ。そのうえで、最終段階までの諸資料群になんらかのまとまりを想定する立場と想定しない立場で解釈の仕方に違いがあるが、著者はそうした先行研究の成果をしっかりと咀嚼しつつ問題点に適切な批判を加える。第4章以下では、1990年代以降、構成体説と呼ばれる研究が台頭したこと、及び、そうした解釈の可能性を開く端緒となったのが、箴言の特異な作詞法である「並行法」の新定義であったことを論ずる。第5章では、自身もこの新定義を支持する理由を述べ、構成体説の構造分析に必須の、反復された詩文の機能を分析して、箴言第II部が構成体を為すことを仮説として提示する。そして最後に、構成体説に依拠しつつ箴言第II部の中から、義人と邪悪な者の対句表現が頻出する第10～12章の読解方法を示して、著者の構想する箴言解釈を説得的に紹介する。

箴言研究は、高度な周辺文化の影響を考察する上で重要な文献であることから、比較思想的視点からの多くの先行研究があり、伝承文学の特徴を考慮して、並行法の新定義などの分析手法を導入した新たな研究と旧来の立場を踏襲する研究が続々と提示され、研究史を把握して研究の現状を紹介するだけでも容易ではない。確かに、本論文では、慎重さを期すあまり、箴言を構成する格言集が本来どういう生活の座をもっていたか、あるいは、周辺文化と比較してどこに思想的特異性があるのか、といった重要な課題に対して態度を保留するなど、物足りなさを感じられる。しかし、箴言のもつ口承性や即興性と創作性との葛藤への配慮を示して読解の難しさを認識させ、その困難さを克服するために、詩文の詞に対する丁寧な概念的把握と方法論の明確な分析を示して、明晰な全体像を提示できた点はすこぶる意義深い。

以上により、本審査委員会は、全会一致で、本論文を博士(文学)の資格に値する論文であると判断する。